

もの言う牧師のエッセー 第133話

「西郷の首」

西郷隆永。何を隠そう西郷隆盛本人のことである。実は“隆盛”は彼の親父の名前である。西郷の本名は西郷吉之助隆永といい、彼自身は「隆盛」と名乗ることはなく常々「吉之助」と名乗っていた。書状でもそうになっているため、隆盛と書かれたものは全て偽物か代筆であることが知られている。明治新政府発足時、参議の名簿を作ることになったが、彼の親友の吉井友実が間違っして西郷の父の名を載せてしまい、そのまま関係各国に通達。誤りが露見した後も「今さら面倒だから」とそのままにしたというから何とも愉快的時代だ。

1877年2月14日、陸路東京を目指し約12000の兵が鹿児島を随時出発、日本最後の士族の反乱である西南戦争が始まったが、剛強で鳴るはずの薩摩軍は結局九州から出ることさえ叶わず、やむなく同9月には僅か400名足らずで故郷鹿児島に戻り城山に布陣した。ついに9月24日、40名ほどが残っていた彼らは最後の日を迎え、数万の官軍が総攻撃を開始、腹心の桐野利秋や村田新八らが正座して見守る中、別府晋介が介錯し、西郷の首は落ちた。

そこからがややこしい。首を敵に渡すまいとして弾雨の中を従僕が首を埋めた後、官軍の将校によって発見、官軍の指揮官だった山県有朋らによって確認され、胴体とともに鹿児島市の西郷南洲墓地に埋葬されたのだが、未発見説、偽物説、さらには西郷自身の生存説までもが流布された。が、ついに今年3月、首を発見した金沢の陸軍歩兵第7連隊の千田登文中尉が書いた履歴書が金沢の実家から発見され、その具体的な内容から埋葬された首は本物であることが、実に137年ぶりに明らかになった。しかし結果的に見れば、これまで多くの歴史家たちにより優位を占めていた説が明らかになったに過ぎず、極めてありふれた結末になったとも言える。

前述の名前の誤表記からも想像がつくが、西郷の人気ゆえにいたずらに“謎”が膨れ上がった観は否めない。実は十字架で磔刑されたキリストの死を巡ってもいまだに議論が多くある。問題は彼が死んで3日目によみがえったことだ。聖書ではアリマタヤのヨセフという人がイエスを葬った後、3日目の早朝に婦人たちが墓を再訪した時の様子が詳述されている。

「週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石を脇へ転がして、その上に座ったからである。その顔は、稲妻のように輝き、その衣は雪のように白かった。（中略）御使いは女たちに言った。『恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。』」 マタイの福音書 28章 1-6 節

がそれだ。だがイエスを殺した祭司長たちは、

「夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った。」 同 13 節

などと嘘を流布させたことまで記されている。だが「前から言っておられたように」、イエス自身と分厚い旧約聖書がキリストの復活を預言していたということが、復活の事実を確証する。さらに復活後、500人以上の人間がイエスと再会した。全66巻を一冊にまとめた世界最古の本である聖書の中でも、このマタイの福音書は「世界で最も読まれた本」の異名さえ持つ。まだある。それはキリストの再臨預言である。彼はよみがえっただけでなく、また戻ってくることも記されている。「いつ?」、イスラエルが再建した後である。二千数百年前に滅亡したイスラエルが再建されることが聖書に書かれているが、その預言が今から66年前に実現したことは誰でも知っている。これを「終末論」という。それは、いたずらな議論や“謎”の類を一切寄せ付けない。キリストは、我らの罪の身代わりとなって死に、復活したのである。したがって、その墓は今も空である。この“当たり前”の事実を信じよう。 2014-4-20



